

# 第1章 戦場

## シベリアでの捕虜生活① 抑留で知った勉強の大事さ

小島敏郎さんのお話から

○召集 人を軍に呼び集めること。

○占守島 千島列島北東端の島。表紙裏地図

私は、昭和十五年（一九四〇年）頃に召集を受けて盛岡に入隊し、その後、アメリカへの防備として北千島の占守島へ行きました。

占守島での駐留生活は、日本軍の陣地作りと訓練でした。占守島はとにかく風が強いところでした。冬の吹雪はすさまじいものでした。だから、夜中に外のトイレに行くのに迷ってしまふのです。夜中にトイレに行つて、そのままいなくなった人もいました。

戦争が終わつたのは昭和二十年（一九四五年）八月十五日ですが、それを私はラジオで知りました。よかつたという気持ちと、どうなるんだという気持ちが半分半分でした。

ところが、戦争が終わつて三日たった十八日にソ連軍が攻めてきたのです。こちらは戦争をやる気はありません。しかし、バンバン撃つてくるのです。我々も仕方なく防戦しました。

島には戦車隊がありました。戦車隊は敵陣に死ぬ覚悟で突撃していきましました。我々は歩兵なので、トラックに乗っていました。我々も前線に出て、撃ち合いをやったのです。たまたま私は死にませんでした。そのときの戦いは、三日間ぐらい続きました。しかし、日本はすでに降参しているのですから、あんな島で勝つたつてどうしようもないわけです。それで戦う気がないことを示す白旗を持った人をソ連軍へむかわせたのですが、その人も撃たれてしまう状態でした。二回、三回目でようやく敵と連絡がとれて休戦したということなのです。まだ当時の戦車の残骸が島に残っていると、つい最近テレビで知りました。

捕虜になつた我々は、占守島で船に乗りました。我々はつきり東京へ帰れると思つていた

○捕虜 戦争などで敵に捕らえられた人。  
○カムチャツカ半島 表紙裏地図

のです。ところが、何時間かたつと船は急に北へ向きを変えて、カムチャツカ半島の奥、オホーツク海のマガダンというところへ行ってしまったのです。我々を監視しているソ連の兵隊も知らなかったらしく、夏服のままシベリアへ行ってしまったのです。

マガダンは北緯六十度でとにかく寒く、最初は仲間が随分風邪で倒れました。後から冬服をくれましたが、冬は零下四十五度になります。最初の冬はとても寒かったです。

日本は負けました。しかし、占守島では日本が勝っていました。それで、占守島の日本人を一番悪いところに追いやったのでしよう。上陸した港から収容所へ向かう道路の両側にロシア人が並んで見ていました。こちらは勝ったわけだから負けた気がしなかったのに捕虜になってしまったのです。そこで四年間の捕虜生活を送りました。

最初の二年は、敵同士だから、警戒心をもっており、間違えて撃たれた者も沢山いました。我々も冬の吹雪の中で上着を脱いで、やるならやれとソ連兵にくっついてかかることもありましたが、やがて、捕虜生活が長くなりそ



イメージ図

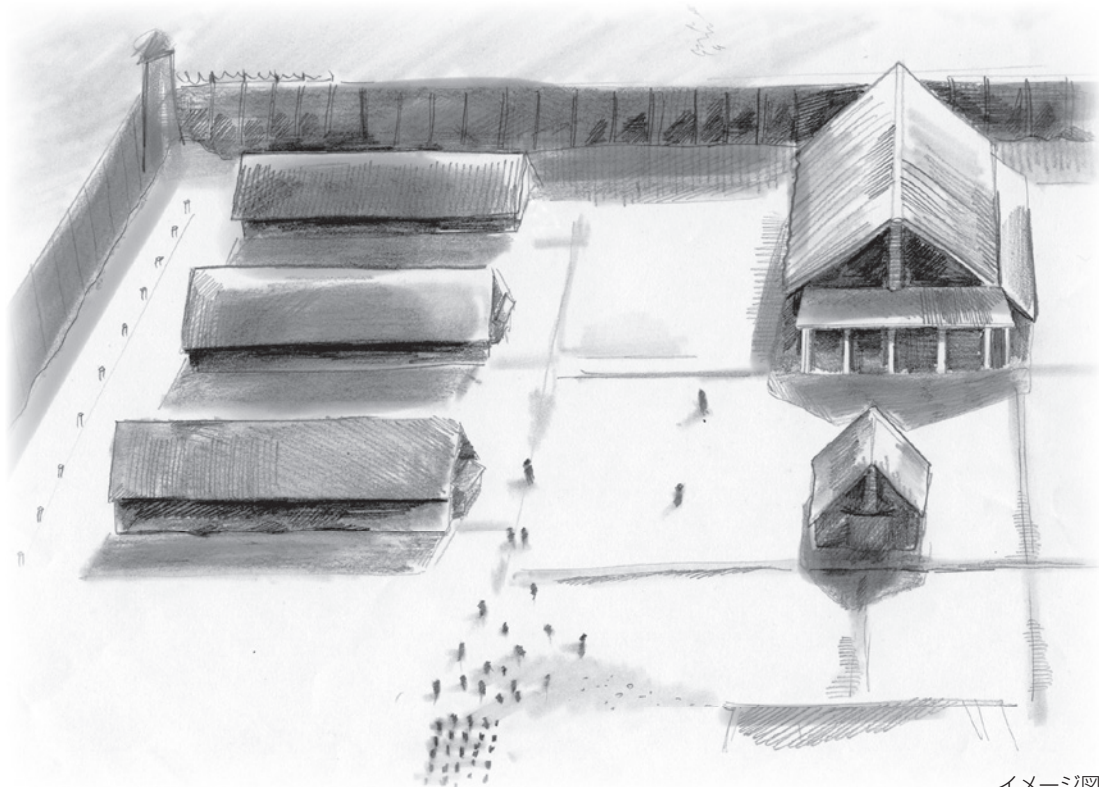
占守島に今も残る戦車

抑留で知った勉強の大事さ

うだと思いはじめ、我々はロシア語を勉強しました。ロシア語といっても教科書があるわけではなく辞典で勉強しました。また、ロシア人と仲よくなり、英語とロシア語が書かれた中学生の教科書をもらい勉強しました。

収容所での作業にはノルマ（目標）があり、ノルマを達成するとパンがもらえたのです。悪かったらもらえるパンの量が減るのです。穴掘りだと、穴の大きさ、広さ、深さ、粘土か砂か石かなど、ノルマは細かく決まっています。砂地だったら簡単だけれども、深く掘ったらつぶれてしまうから、ノルマを達成するのはなかなか難しいものでした。

私が従事したのは、ほとんどが家屋建築です。私たちは三交代で働き、機械は二十四時間動かしていました。向こうの冬は夜が長いのです。三時になると暗くなってしまうのですから。冬だったらほとんど夜の作業なわけです。ただでさえ寒いシベリアの夜は一段と冷え込みます。私も、海岸に砂を取りに行くのに、トラックに乗っ



イメージ図

収容所の様子

ていただけなのに足が凍傷になりかかってびっくりしました。

日本の兵隊が死ぬと、死体置き場で、穴を掘らされました。凍った人間を埋めるのですが、死体を埋める穴を掘るのに随分苦勞しました。とてもつらい仕事でした。

ともかく食べ物がないのは辛かった。出てくるものは、主におかゆでした。もちろん米のおかゆではなく、オートミール（えん麦）とかコウリヤンのおかゆです。いろんな苦勞をしました。満州、樺太、千島などから、全部で五十七万人が捕虜としてシベリアに連れて行かれました。その内七万人が死んだのです。

日本に戻ったのは昭和二十四年（一九四九年）です。連れて行かれた時と同じようなことになるのではないかと、舞鶴に着くまで心配で心配でなりません。帰るときは日本の船で日本の御飯を食べました。久しぶりのお米は本当にうまかったです。舞鶴に近付くと、シベリ

アにはない木々の緑があり、港では、みなが日の丸を振って迎えてくれ、うれしかったです。「帰ってきたな。」という感じがしました。ところが、シベリアで食べた黒パンがたまに食べたくなることもあります。変なものです。

今思うことは、勉強は大事だということ。私たちは苦勞してロシア語を勉強したために助かったようなものです。そして、ものごとをマイナスではなくてプラスに考えるのです。例えばコップに水が半分入っているとした場合、半分しかないというのではなくてまだ半分ある。こういう考え方でいること。そういう考え方で生きていくことが大事なのです。

DATA

平成22年度中央区平和事業  
聴き取り

- ・平成22年8月25日
- ・中央区役所



小島敏郎(こじま・としろう)さん

- ・大正10年(1921年)生まれ
- ・札幌市中央区在住